

本書の想定読者層

本書は、医学に関係する高等教育機関（大学等）で学んでいる学生を対象に発刊されてきた「好きになるシリーズ」の一冊です。

医学部、薬学部、看護学部だけでなく、漢方医学の考え方に関心のある他の学部の学生も読者として想定されています。

学生のみなさんが卒業してから、医療現場で仕事をするとときに、本書で学んだ漢方医学の考え方が役に立つように書かれています。

日本の医療の現場を見ると、漢方医学の基本的な考え方を学生時代に理解しておくことが必要不可欠になっていると言えます。

なぜなら、全人的な医療に対する患者のニーズが高くなり、そのニーズに応えることが漢方に期待されているからです。

すでに、さまざまな疾病に漢方薬が応用され、その有用性が明らかにされてきています。

漢方薬を服用する患者の数、処方する医師の数、調剤する薬剤師の数、服用中の患者を看護する看護師の数はこれからも増えていくことでしょう。

そこで、学生だけでなく、実際に医療現場で仕事をしている医師、薬剤師、看護師にとっても、本書は役に立つように書かれています。

学生向けの読みやすい本ではありますが、その内容は単なる入門書ではなく、漢方医学独自の見方や考え方を本格的に学習できるものとなっているからです。

漢方医学を学ぶときに重要なことは、入門的な知識を頭の中に詰め込むことではありません。

漢方医学的な見方や考え方を体系的に理解し、患者中心の全人的医療を実践できるようになることなのです。

漢方医学の土俵で漢方薬を使うために

日本では、陰陽や虚実、寒熱、六病位、気血水といった漢方医学独自の病態をあまり考慮せず、西洋医学的な病名や症状によって漢方薬を使っている医師が多いというのが現状です。

喩えて言えば、西洋医学の土俵で漢方薬を使っているようなものです。

もちろん、漢方医学の土俵で漢方薬を使うことを心がけたほうが、漢方薬を有効かつ安全に使うことができます。

それでは、漢方医学の土俵で漢方薬を使うためにはどうすればいいのでしょうか。コンピュータを使う前の準備に喩えると次のようになります。

第一に、漢方医学の基本ソフト（OS：オペレーティングシステム）を脳内にセットアップしておく必要があります。

第二に、漢方医学の応用ソフト（アプリケーションソフト）を脳内にインストールしておく必要があります。

西洋医学の場合、解剖学や生理学、病理学といった基礎医学が基本ソフトに相当し、内科学や外科学、皮膚科学といった臨床医学が応用ソフトに相当します。

学生は、はじめに基礎医学を学んで理解し、それから臨床医学を学びます。基礎医学という土台がしっかりしていれば、その上に乗っている臨床医学が動揺することはありません。

漢方医学を学習するときにも同じことが言えます。

漢方の基礎理論をしっかりと学んで理解してから、漢方の臨床アプローチについて学ぶようにしたほうが、確実に上達するのです。

そこで本書は、次のような3つのステップで漢方医学を学習できるように構成されています。

漢方医学を学習する 3つのステップ

1) 漢方の特質を理解する

漢方を学習する第一のステップは、漢方薬の特質や漢方医学の歴史を学びながら、漢方医学独自の診断・治療体系についてもその概要を知ることです。

本書の第1部を読めば、西洋医学とは異なる漢方の特質について理解できるようになっています。

2) 漢方の基礎を理解する

漢方を学習する第二のステップは、漢方医学の基礎理論を学び、あなたの脳内に基本ソフト（生体に対する漢方医学的な見方や考え方）をセットアップすることです。

本書の第2部を読んで、漢方医学の基本ソフトをセットアップすれば、漢方の基礎理論を本格的に理解できるようになっています。

3) 漢方の臨床を理解する

漢方を学習する第三のステップは、漢方医学の臨床アプローチを学び、あなたの脳内に応用ソフト（疾病に対する漢方医学的な見方や考え方）をインストールすることです。

本書の第3部と第4部を読めば、疾病プロセスにフォーカスした六病位アプローチと、不健康状態にフォーカスした気血水アプローチについて体系的に理解できるようになっています。

また、これら2つのアプローチを活用した漢方診療の実際については、筆者の『プライマリケア漢方』（日本医事新報社）を合わせて読むことで理解が深まると思います。